

《第97回例会》講演と交流の集い



石川慶監督 ポーランド映画の魅力を語る！

～ポーランド国立映画大学、ケシロフスキ監督、『デカローグ』ほか～

石川監督からのメッセージ

札幌は、以前にも短編映画祭に何度も出品していた過去がありとても思い出深い地です。『デカローグ』は自分にとっても映画作りの教科書のように長年見続けてきた作品ですので、思い出深い地で、思い出深い作品のお話ができることを楽しみにしています。

2021 9/17 (金) 18:30～

**[変更] 北海道クリスチャンセンター
3F 研修室 G301 (北7西6)**

入場無料・予約必須・定員先着20人・問合せ・
申込み先 (お名前・住所お知らせください)

 & fax 011-384-5984 (園部)

 hokkaidopolandca@gmail.com

[COVID-19 対策] 互いの距離をとり換気を行います。マスク着用をお願いします。飲食の提供はありません。
感染拡大のためイベントが延期・中止になる可能性があります。

共催 ポーランド広報文化センター

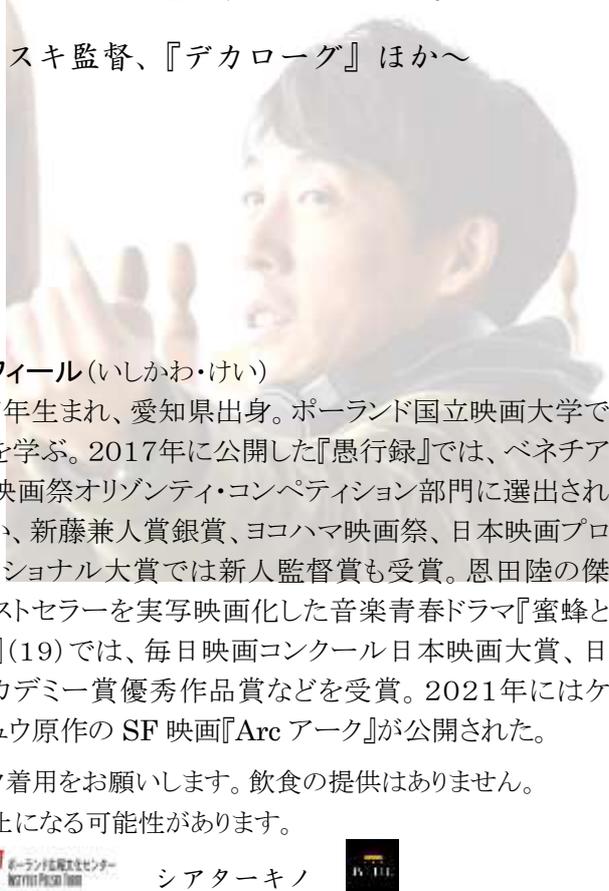


シアターキノ



プロフィール (いしかわ・けい)

1977年生まれ、愛知県出身。ポーランド国立映画大学で演出を学ぶ。2017年に公開した『愚行録』では、ベネチア国際映画祭オリゾンティ・コンペティション部門に選出されたほか、新藤兼人賞銀賞、ヨコハマ映画祭、日本映画プロフェッショナル大賞では新人監督賞も受賞。恩田陸の傑作ベストセラーを実写映画化した音楽青春ドラマ『蜜蜂と遠雷』(19)では、毎日映画コンクール日本映画大賞、日本アカデミー賞優秀作品賞などを受賞。2021年にはケン・リュウ原作の SF 映画『Arc アーク』が公開された。



映画による十戒 ～ケシロフスキ監督『デカローグ』～

久山 宏一

ケシロフスキ生誕 80 年・没後 25 年

今年(2021年)は3人の偉大なポーランド人映画作家の記念年です。年長順に列挙すると、『パサジェルカ』のアンジェイ・ムンク(1921~61)の生誕100周年・没後60周年、『灰とダイヤモンド』のアンジェイ・ワイダ(1926~2016)の生誕95周年・没後5周年、そして『トリコロール』のクシシュトフ・ケシロフスキ(1941~96)の生誕80周年・没後25周年です。1940年代末～50年代前半に映画監督として独り立ちしたムンクとワイダは、その10年後に「映画におけるポーランド派」を代表する監督として世界的名声を獲得します。ケシロフスキは同派が退潮期に入る1960年代半ばに映画作りを始めました。

創作の三つの時期

30年に及ぶ彼の創作は約10年ごとに3つの時

期に分かれます。①記録映画時代②弁護士クシシュトフ・ピエシェヴィチ(1945~)と出会うまで、そして③シナリオをピエシェヴィチと共同執筆した時代です。第3期の前半(1984~88)はポーランドで、後半(91~94)はポーランドの体制転換と軌を一にするように、国境を越えた「世界映画」を撮りました。



ケシロフスキの25回目の命日にあたる本年3月13日、ピエシェヴィチはケシロフスキとの共同作業を回顧した『「終わりなし」から終わりまで』(映画評論家ミコワイ・ヤズドンによる聞き書き)を刊行しました。表題の『終わりなし』(84)とこの度日本で劇場再公開される『デカローグ』(88)は第3期の前半、『二人のベロニカ』(91)『トリコロール』(93~94)は後半に作られました。

『デカローグ』はそのタイトルが示すように、1時間弱のTV映画10本の連作、そこから2本の長編劇映画『殺人に関する短いフィルム』(87)と『愛に関する短いフィルム』(88)が派生しました。『トリコロール』もタイトル通り、3本の長編『青の愛』『白の愛』『赤の愛』から構成されています。連作性はケシロフスキ+ピエシェヴィチの創作の一つの特徴です。

『デカローグ』

以下、『デカローグ』に焦点を当ててみましょう。

2人のクシシュトフが依拠したモーセの十戒のうち、第1～4戒は神に対する規定(「他神崇拜・偶像禁止」「神名濫唱禁止」「安息日遵守」「父母尊重」、第5～10戒は隣人に対する規定(「殺人禁止」「姦淫禁止」「窃盗禁止」「偽証禁止」「隣人の妻侵害禁止」「隣人の財産侵害禁止」)です。両群で、最初の2戒は神・隣人についての本質論、残りは補論(神への態度、隣人の所有する事物との関係)とされています。

十戒に倣った映画を作るアイデアは、ピエシェヴィチからケシロフスキへの提案だったそうです。それを示すかのように、『デカローグ』のシナリオ作者名は「Piesiewicz / Kieślowski」の順にクレジットされています。

2人は映画で「混沌と無秩序」(ケシロフスキ)に抗する「統一と秩序」を打ち立てようとして、それを社会主義ポーランドの政治・貧困・伝統への言及抜きで遂行しました。困難な試みは大成功を収め、作品誕生から30数年を経た今でもほとんど古びることなく世界中で鑑賞されています。

鑑賞の順序は自由に

『デカローグ』の各篇が十戒に倣って並べられているなら、別の順序で並べれば…といった仮定は的外れです。これは、編集段階でさまざまな配列を試すことができるオムニバス映画ではありません。しかし、必ずしも1～10の順で観なくてはならない

わけではなく、バラバラの順で全話を観て、それから脳裏に連作の全体像を作り上げても、単独の挿話を抜き出してそれだけ観てもかまいません。いずれにせよ、どの「禁止」に関わる挿話か?だけは、鑑賞の前後に確認しておくことをお勧めします。

最後に個人的な感慨を記します。私は『デカローグ』全篇を初公開直後に番号順に観ました。その後、時々気分ですまざまな挿話を抜き出して観なおしています。珠玉の短編映画ぞろいですが、初見時には5・6・8に強く惹かれたように記憶します。その後、年齢を重ねるにしたがって2・3・9・10が他人事ではなくなってきました。仮に私に子どもがいたなら1がより切実に迫ってくるでしょうし、女性には4・7が痛いほどわかることでしょう。『デカローグ』は観る人の性別・年齢・境遇によって姿を変えていく、万華鏡のような作品なのです。

どの挿話からでもけっこうですから、ご覧になってください。お気に入りの物語があれば、一つまた一つと別の物語が観たくなるでしょう。まずは『デカローグ』という深遠なる森に、第一歩を踏み入れてみてください。必ずや、あなたにとって、末永く付き合いつづける親友のような映画になることでしょう。

『デカローグ』

1. ある運命に関する物語 56分
2. ある選択に関する物語 59分
3. あるクリスマス・イヴに関する物語 58分
4. ある父と娘に関する物語 58分
5. ある殺人に関する物語 60分
6. ある愛に関する物語 61分
7. ある告白に関する物語 57分
8. ある過去に関する物語 57分
9. ある孤独に関する物語 61分
10. ある希望に関する物語 60分

(くやま・こういち、ポーランド広報文化センター・エキスパート、専攻:ポーランドの文学、映画と演劇)

=写真=©Maciej Komorowski



クシシュトフ・ケシロフスキ監督 生誕 80 年 / 没後 25 年記念イヤー

ポーランド映画の金字塔 『デカローグ Dekalog』

1988年 | ポーランド作品 | カラー | HD リマスター版

『デカローグ』は「十戒」を意味し、旧約聖書を踏まえ、現代に生きる人々の日常生活の地平に存在する孤独と愛の苦悩を鮮やかに描き出す心揺さぶる珠玉の十篇

〈誰の人生でも探求する価値があり、秘密と夢があると私は信じているんだ〉

ケシロフスキ監督

シアターキノ、9/18(土)～9/30(木)、9/18 16:40～「ある運命に関する物語」上映 & 17:37～18:10 石川慶監督講演「ケシロフスキ映画の主題と魅力」
入場整理番号付きチケット 1800円、KINO 会員証提示で 1300円 (定員 41席)